

あを 11

2016





版画 武井石艸

冬紅葉片目の鳥を籠に入れて
冬川となる黒帯の縦むすび
だしぬけに菊ちる人の死の軽さ
枯芙蓉ながいものから弔電読む
枯野の母と逢ふ煙草一本の時間
羽子板市目無だるまが灯の終り

堀内一郎

川の字の一劃短か蚊遣香

佐藤喜孝

水音 昭和 48 年 12 月

あそ

十一月



雑詠

東京

佐藤 喜孝

暮年なり二度と使はぬ蟬の穴
われより先はらわたのあり秋の風
疊のうへをあるいてきたり夜の蟻
秋夕焼遠くの国から来たやうな
かひなとは白きものなり乱れ萩

東京

田中 藤穂

帰燕

空に充つる帰燕の声の賑やかな
天おほふ帰燕の今し海上へ
無事ゆけと帰燕見送り砂の浜
堀の水青く澱みて葛の花
語らへばたれも一病秋を待つ



石川 中川句寿夫

出来秋

実の榎 櫛目鼻画けば卒寿かな
言葉つつしむ木犀の香なりけり
小判草の種採つてゐて地獄耳
出来秋のそつとしてをくものもらひ
敬老日父を訪ねて用問はる

三重 長崎 桂子

秋微雨こさめ

秋微雨 足進む音宮の森
秋微雨 風止み空気洗ひけり
ひとときは秋微雨愛で浴したり
八月にはや帰り花賑はしく
秋暑し手提にいつも水を持つ

東京 森 なほ子

芝伸びて

新涼や早々と着く待ち合せ
東から西へ爆音百日紅
芝伸びて夏の旅はや思ひ出に
水色のロッカールーム今朝の秋
休暇果つシャツ脱ぎ捨てしままのソファ―

埼玉 山莊 慶子

種を採る

少年の櫛滑らせて秋隣
種を採る朝の樂しみひとつ消ゆ
お返しは孫の育てし秋茄子
草の実や形見なる帯とどきけり
色変へぬ松やふらここ高みより



東京

赤座 典子

こむらがへり

明け暮れを縷々語る友秋の亭
手土産の馬鈴薯を夫好みしと
小鉢には味噌味香る拔菜漬
秋海棠の緞帳眺め露天風呂
吉田拓郎も初転筋の白露かな

埼玉

秋川 泉

秋深く

迫り来る颱風の音にぎりめし
ひらけたり颱風の目の青天井
韋駄天のお龍と云はれ運動会
真つ直ぐにのびる細道月のぼる
闇を出てこほろぎ親子闇に入る

東京

石森 理和

西瓜割り

虫の声急に止みをり空気圧
西瓜割り居合はす我もご相伴
水平線かき消すほどに霧深し
花泥棒させない気品曼珠沙華
青みかん枝のしなりてをりにける

山梨

井上 石動

雑詠

落ちてゆくつよき夕日や残り菊
雲間日のさつと刷きたり遠紅葉
秋日濃く蕘焼く煙の香ばしく
窓に干す名入手拭月の宿
決断の箸つけにけり茸汁



埼玉

大日向幸江

農業科

竜胆を駅に飾るや農業科
白鷺の追ふその先のイナゴかな
山の寺守宮を見つつ眠る夜
曼珠沙華つけ火のごとく夜は燃えて
日本海茫茫たるや赤蜻蛉

千葉

黒澤 佳子

茄子

糠床の茄子取り出すや捌きながら
口癖に疲れると言ふ吾亦紅
面白き名に覚えたり小判草
プチトマト二握りなりピクルスに
銀座裏花屋のすすき堂堂と

東京

佐藤 恭子

雑詠

初夏や井の頭の友花子さん
原発稼働に猿も驚く梅雨入かな
改悪に心動ぜぬ終戦日
行動は遷すに限る終戦日
行動は素早く慎重終戦日

東京

七郎衛門吉保

高野山

宙を見つ高野の塔碑風祭
厄日にも高野墓碑群泰然と
写経する素秋高野の別世界
新涼の来ぬ九度山の真田庵
根来寺の笑ふ如来や豊の秋



東京 篠田 純子

水の秋

長き間を羽繕へり水の秋
右に桴左にマイク音頭取る
インクの滲む罹災証明終戦日
天皇の目に9条守れ稲稔る
US 西麻布星条旗新聞社 ARMYの金網くぐる蠡斯

石川 定梶じよう

水の秋

片かげの押しよせてくるマンホール
なつかしむ岨の赭土帰省バス
蛾へ点す信用金庫の軒行燈
落ちてゐて西瓜の種とすぐ分かる
押し出されたる滝壺の水の秋

埼玉 須賀 敏子

秋暑し

朝顔の越境するは許されよ
秋暑し地下鉄銀座一丁目
踏み出せば苦行と花野聖岳
少年の釣竿軽し秋日向
秋暑し逃げて映画のシン・ゴジラ



遠地にて文旦ふたつみつめあふ	又しても指のさかむけ蠅叩	噴水の高上るとき森消えし	秋暑し天皇老いを語らるる	追つ付けにひよ来る板戸繕ひぬ	今日も又頼る甘酒飲干して	朝顔に転がしてゆく旅鞆	彩雲の帯を締めたる雲の峰	蝉時雨読経がいつか合はせをり
佐藤喜孝	須賀敏子	竹内弘子	田中藤穂	中川句寿夫	長崎桂子	森直子	赤座典子	秋川泉

野菜室使ひ切りたし夏の旅	ぬる爛のまだあたたかし良夜かな	巖から岩ひたひたひたとはんざきの	酷暑なり山手線のドア開く	蓮の露啄む雀二羽三羽	ラッセラーと夫婦跳人と乳母車	煽風機羯諦羯諦と首を振る	渡御過ぎてふたゝび村の辻広し
石森和子	井上石動	大日向幸江	黒澤佳子	佐藤恭子	七郎衛門吉保	篠田純子	定梶じょう

喜孝抄



ていま



白聖紀に人の靴跡けふも暮る

佐藤 喜孝

時空を超えた不思議な気分になりました。茨城県に白聖紀の地層の露出している海岸があるとのこと。行って見たいと思いました。「けふも暮る」の日常感覚と、「白聖紀」のとてつもなく昔の時代との対比に、魔法をかけられたみたいになりました。(純子)

八月やむのたけじさん星になる

須賀 敏子

終戦と同時に新聞社を辞め、生涯を反戦の主張をされた方。八月に亡くなられた事で、一層人々の記憶に残ることでしょう。星になるの表現で、作者の思いが伝わりました。(純子)

又しても指のさかむけ蠅叩

須賀 敏子

体質であらうか、わたしもよく小爪やささくれが出来て困ることがある。作者もよくささくれが生じるやうだ。些細な変調なのだがイライラする。季語の「蠅叩」は極上のおもしろ味である。(喜孝)

金魚玉ひとを隔つは隔てる

竹内 弘子

作者と他の人とのほざまには、ガラスの様な仕切りがあつたみたいです。無ければ水も金魚も作者にかかつてしまいます。作者と人を隔っていたのは、作者の繊細さであつた事を、この句で理解しました。(純子)

やや遠い木に移りたり法師蟬

田中 藤穂

作者は一匹の法師蟬に集中しています。いまそこで鳴いていたのに、飛びました。少し遠い木からオーシオシーと鳴きはじめ、安堵する作者なのです。(純子)

ていることを知つたと言う句意です。昔の勇壮なアダ名なのか、はたまた女性におモチになっている際のお名前か。夕化粧の季語が意味深です。(純子)

秋暑し天皇老いを語るる

田中 藤穂

唐突に天皇がテレビに出てきて「老いと天皇典範」について制約のある中で意見を述べられました。藤穂さんも驚かれたのであらう。驚きを素直に記述された。そのことが天皇と云ふ立場の人に対する思ひの込める表現になった。「やや遠い木に移りたり法師蟬」の空間表現、「帽子みなゆるくて夏を老いにけり」の身辺の些細な事柄からの老いの表現、参考になった。(喜孝)

追つ付けにひよ来る板戸繕ひぬ

中川句寿夫

鴨はわが町でも見かける雀鳥について親しみのある鳥。句寿夫さんも鴨への親近感があるやうだ。あの夏が終わったら「追つ付け」すぐに鴨が来る、冬仕度をせねばといふころ急ぐ土地の季節感を色濃くそして軽々と詠まれてゐる。「もうすぐひよ来る」と並べると、掲句の佳さが分かる。「またの名を妻がしりぬて夕化粧」の諧味、「膝立し足の爪切る糸瓜かな」の糸瓜かなによる生活風景がなんともよい。

またの名を妻が知りぬて夕化粧

中川句寿夫

最近になり作者の「またの名」を、奥様が知っ

又の名は持たず小林多喜二の忌 遠山 陽子

(喜孝)

曙光や露草の露呼応する

長崎 桂子

露草と作者が一体化しているようにも思える句です。朝日の色が露に映って、露草と作者の、涼やかな一日が始まります。(純子)

今日も又頼る甘酒飲干して

長崎 桂子

老境に入ると薬に頼る日々になる。サプリメントや青汁、蕨茶などは薬とは違ふが頼りにしてゐる人も多い。作者は日本古来からある“甘酒”を愛飲して夏を越さんとしてゐる。わたしは酒粕から作る物だと思つてゐたが、本当の甘酒は米麴と米と水だけで作るさうだ。この甘酒を毎日飲んでゐると疲れにくくなり免疫力も増すさうだ。「飲み干して」が一日の始まりの声かけのやうだ。(喜孝)

久米島のスコールに濡れ波に濡れ

森 なほ子

旅好きの作者は、久米島に到着。さつそくスコールの歓迎です。雨風にも、波に濡れようとも、楽しそうな作者が見えて来ます。(純子)

朝顔に転がしてゆく旅靴

森 なほ子

旅の朝立ち、道の辺の朝顔にちよつとごあいさつなどして心が弾む。大きなキャリアバックをガラガラ引きずってゆく。悪路だと朝の静けさを破る無骨な音がある。「転がしてゆく」になほ子さんのはたらきが出てゐる。(喜孝)

幼子に言ひ負かされゐる酷暑

赤座 典子

身につまされる句です。私も同じ経験をしています。特に暑さで参つてゐる所を攻められる

と、ギブアップです。(純子)

彩雲の帯を締めたる雲の峰

赤座 典子

わたしも彩雲を数度見たことがある。虹とは又違ふ厳かな趣があつた。中野駅頭で見付けた時は道行く人に教へたいと云ふ衝動に駆られて困つた。典子さんもこの感動をどうにかして俳句に留めたいと苦労された。「締めたる」は疑問が残るが素直な表現でゆるされると思つた。

(喜孝)

ひぐらしに急かされ野外映画会

秋川 泉

夏休み、小学校の校庭で映画会がありました。友達と体育座りして観る映画は、楽しく又、夜の学校もいつもと違つ秀囲気でした。「ひぐらし」に、のどかな時代と土地柄を感じました。

(純子)

晴れ女雨女居る丸団扇

石森 理和

丸団扇を扇いでゐる女性達。「ひと雨来たら涼しくなるのにねえ」「駄目よ。あなた晴れ女ですもの。雨女の私」と団扇を翳すと、雨が降り出します。昔話の様な世界です。(純子)

野菜室使ひ切りたし夏の旅

石森 理和

日頃料理をする人ならではの思ひを知らされた。冷蔵庫の“野菜室”であらう。旅で家を空ける間の冷蔵庫の野菜が気に掛かる、使い切つてゆこうと思ふのだが……。日常の些細な事柄を俳句に留めるのも大切。(喜孝)

鬼の子へ風はララバイよう寝るばい

井上 石動

蓑虫に良い風が来て、揺れ具合が子守唄のようです。それに連れ作者の臉も重くなったので

はないでしょうか。ララバイと、寝るばいの韻が楽しいと思います。(純子)

ぬる爛のまだあたたかし良夜かな

井上 石動

たゆたふやうな時の流れをおぼえる。ぬる爛を呑むでもない呑まないでもない風情。わたしにはこのやうなゆとりはないが、理解は出来るつもり…………。(喜孝)

夏鴉なんじゃもんじゃに巢をかけて

大日向幸江

珍しい木に巢をかけたものです。見上げる作者は、「なんじゃこれ」と、見上げています。です。「もんじゃ」の感じも、鴉の巢を連想して楽しい句と思いました。(純子)

巖から岩ひたひたひたとはんぎきの

大日向幸江

大山椒魚の動くさまを描く。自然界で見たの

朝日新聞を、「あさしひんぶん」と言う人も、近頃はいなくなっていました。(純子)

終戦日鯉はうしろを向けません

佐藤 恭子

旧社会党シンパの恭子さんにとっては今の政情はなんとも歯痒いことであらう。鯉に託す作者の思ひは一途である。ひとに理解を求める意識の少ない恭子さんには難解な句も多いが、こちらから理解しやうとする意識があれば作者の意識内に近寄ることがすこしは出来さうだ。

(喜孝)

ラッセラーと夫婦跳人と乳母車

七郎衛門吉保

ねぶた祭が縁で結ばれたのでしょうか。赤ちゃんをベビーカーに乗せ、祭に参加している夫婦は、元気いっぱいなのでしょう。「めおと」「はねと」の韻が読み手をも元気にさせてくれます。

であらうか。そのことはともかくとして大山椒魚のゆっくりとしかし確実に移動するさまを「ひたひたと」と表現、句末を「はんぎきの」としつかり止めぬことも功を奏してゐる。「巖から岩」も場を彷彿とさせる。(喜孝)

酷暑なり山手線のドアが開く

黒澤 佳子

電車を待つ山手線のホームは暑さの極みです。到着した電車のドアが開くと、スーッと涼しい風が来て「あゝ助かった」と作者のつぶやきが聞こえるようです。「山手線のドアが開く」の表現に、臨場感と説得力を感じました。(純子)

酷暑かな透きつ歯からは江戸訛

佐藤 恭子

「べらぼうな暑さじゃねえか」天を見上げて汗を拭う、年配の職人さんが、見えてきました。

20

タグボートゆっくり急ぐ夕立して

定梶じょう

(純子)

タグボートは、その用途故に船の屯数より、馬力が有ること。大きなものを曳航中に夕立が。エンジンの音は大きいのに、スピードがいまひとつ遅いのを、焦って見ている作者です。

(純子)

渡御過ぎてふたゝび村の辻広し

定梶じょう

太鼓や神輿の賑やかな一団が過ぎた後の村の辻、じょうさんもそこに佇まれてゐるのかも知れない。「広し」に一抹の寂寥感を覚えた。(喜孝)

21

比来披見

ホトトギス 十月号
 秋灯の明るき下で待つことに
 水面ちよと凹ませてゐる秋の雨
 沖 十月号
 甚平着て忘れしふりを通しけり
 雨月 十月号
 百日紅紫がかかるこそ佳けれ
 槐 十月号
 自らを中心に据ゑ水を打つ
 馬酔木 十月号
 曲がるまで見送られたる夕月夜
 風土 十月号
 茗荷の子でんでに傾ぎ現るる
 京鹿子 十月号
 竹林の節の高きに秋のこゑ
 六花 十月号
 サルビアを吸へと女の薄笑ひ
 鳴 十月号
 れもん置くただ端正にあらんとす
 夕電車夏野の景を置去りに

稲畑 汀子
 稲畑廣太郎
 能村 研三
 大橋 暁
 高橋 将夫
 徳田千鶴子
 南 うみを
 鈴鹿 呂仁
 山田 六甲
 井上 信子
 高橋 道子



万象 十月号
 葉桜の影白壁に上下して
 春燈 十月号
 一村の屋並を洗ふ野分かな
 末黒野 十月号
 子別れの鳥か騒ぐ屋根の上
 わが胸の高さを出でず梅雨の蝶
 雲の峰 十月号
 登高やリフトに五分脚垂らし
 萱 十月号
 いろならば古代むらさき蛸狩り
 青蜥蜴ダム一望の石の上
 蓮見舟また一人乗りゆれにけり
 朝 十月号
 都電一塊煌々たるも露けしや
 こだま 六月号
 黄花コスモス今日の散歩の一里塚
 やぶれ傘 91号
 飛行船が向き変へてゐる麦の秋

大坪 景章
 安立 公彦
 小川 玉泉
 松本三千夫
 朝妻 力
 木村 嘉男
 亀田虎童子
 小島 良子
 岡本 眸
 松林 尚志
 大崎 紀夫
 (喜孝)

あをキーワード俳句辞典(こへこみ)

御幣
 棟上げの御幣しろじろ初時雨
 花詰みて御幣のやうに山法師
 湖北
 湖北より友の絵葉書さはやかに
 齧
 齧落し水が水追ふ那智の滝
 遠き日の一齧にありサクランボ
 ブロック塀一齧欠けて雪柳
 映画の一齧若葉の並木通りかな
 小間
 たかなや膝寄せあつて小間の席
 小間客間暗きに近き冬ともし
 ひっそりと雛飾られて寺の小間
 高麗
 野仏に菊たつぷりと高麗の里
 狛犬
 狛犬と子犬戯れつく額の花
 阿の獅子と叫の狛犬日永かな
 狛犬にいが栗ひとつ供へある
 歳月に欠けし狛犬春の雪
 西行堂狛犬に乗る日陰雪

鎌倉喜久恵
 赤座 典子
 早崎 泰江
 石森 理和
 森山のりこ
 須賀 敏子
 長崎 桂子
 篠田 純子
 堀内 一郎
 田中 藤穂
 須賀 敏子
 石森 理和
 定梶じょう
 鎌倉喜久恵
 田中 藤穂
 赤座 典子

狛犬の背にとどまる夏落葉
 狛犬の耳立て尾立て日雷
 細かい
 細かき字読まむと出でて十一月
 水引の細かな花の強かな
 樟は白く細かき花散らす
 駒形
 駒形へ龍にならんと温め酒
 小枕
 小枕ほどの冬瓜を買ふ道の駅
 小町
 若き日は小町と呼ばれ夏衣
 おぼろ夜の前をゆく人小町の忌
 鎌倉の大町小町額の花
 大蟻螂眼は真緑に小町針
 小窓
 飛行機の小窓数多や冬の星
 拱く
 拱くは鳥の死骸虎落笛
 裏街の小店ののれん春燈
 松過ぎの小店を覗く花川戸

佐藤 恭子
 定梶じょう
 定梶じょう
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 堀内 一郎
 赤座 典子
 田中 藤穂
 佐藤 喜孝
 鎌倉喜久恵
 石森 理和
 東 亜 未
 石森 理和
 芝宮須磨子
 田中 藤穂

芭蕉さんの手紙 井上石動

まさ・おふう↓寿貞さんの娘。

好齋老人↓江戸での芭蕉さんの頼みの人の一人。

芭蕉さんを、とても身近に感じ、あれこれ読んで学んでいます。心が震える芭蕉さんの手紙に、次の二つあり。

数ならぬ身とな思ひそ玉祭

芭蕉さんが没年の六月。受け取った寿貞さんの悲報の返信として、江戸で芭蕉さんの片腕たる人への手紙。

『寿貞無仕合せ者、まさ・おふう同じく不仕合せ、とかく申し尽くし難く候。好齋老へ別紙申しあぐべき候へども、急便にて、この書状一緒に御覧下されたく候。何事も何事も夢まぼろしの世界、ひとこと理屈はこれ無く候。』

*寿貞尼↓芭蕉さんと深い縁だった女性。

松尾半左衛門様

十月

桃青

*ばばさま↓兄嫁
およし↓芭蕉さんの末妹

『ここに至って申し上げる事御座無く候』

この記憶が確かであれば、伊賀上野の芭蕉翁記念館でこの本物を見た覚えがあります。そして今夏、大坂へ伏見へ義仲寺と運ばれて来た芭蕉さんと、義仲寺にて出会いました。

「俳聖芭蕉」ではなく、「俳聖と崇められる以前」の、一個の人間として苦しみ、学び、俳諧に全人生を捧げた芭蕉像、に惹かれます。先人の研究に学び、さらに己の連想力を駆使して探る芭蕉像。そうすると、芭蕉さんがどんだん、身の内に入ってくるのです。

芭蕉さんは 何度も何度も作風を変えていきます。いつもいつも『昨日の己に飽き』前へ前へとどんだん進んでいきます。その速さに、その句想に、弟子たちは誰もついて行けません。だから、芭蕉さんはいつも「独りぼつ

この寿貞尼と芭蕉さんとの「関係」では、百人百様の見解ですが、芭蕉さんの年季奉公の妾・寿貞尼と、芭蕉子飼いの桃印との駆落説(田中善信さん説)を私は支持する。

「何事も何事も夢まぼろしの世界、ひとこと理屈はこれ無く候」ここが、なぜかせつななく。

さらにこの句で「なくそ」の否定形も学べ、なお一層この句が身近になりました。

芭蕉さんが兄に宛てた自筆遺書

御先に立つ候段、残念に思しめざるべく候。(中略)御年寄られ、御心静かに御臨終なさるべく候。

ここに至って申し上げる事御座無く候。(中略)ばばさま・およし力落し申すべく候。以上。

ち」。まさに「行く人なしに秋の暮」であり、「隣はなにをする人」であり、「枯野を駆け巡る」です。

「芭蕉さんが句風を何度も変えているのだから、俺たちもいろいろ挑戦しよう。失敗を恐れずに。」と仲間に向かってはいるのですが、その己自身 十年一日の同類句をなしているのですから……。

己の愚痴は愚痴として、今後も「芭蕉さん追っかけ」を続けていくつもりです。

注・芭蕉さんの手紙は 現代風に改めています。





長崎 桂子

日の出でし鳩鳴く町の残暑かな
校庭や人聲全く無き残暑
冬瓜煮て安らぐ暮し願ひをり
夕されば平和唱へる虫時雨
西風の贈物なり赤蜻蛉

日の出でし鳩鳴く町の残暑かな

上五「日の出でし」の「し」は、この場合下のことばに続く遣いようですから、「日の出でて」とて上五で休止をとりたい。「日の出でて鳩の鳴く町残暑かな」。

校庭や人聲全く無き残暑

「全く無き」と置いて句跨りにする必要があるでしょうか。「校庭や人聲絶えて残暑の候」。

冬瓜煮て安らぐ暮し願ひをり

「安らぐ暮し」が凡に過ぎます。「冬瓜煮て安心立命願ひをり」。「冬瓜煮て」が飛躍していながらよく坐っています。

夕されば平和唱へる虫時雨

日暮れの虫の声を喩えて平和を唱えるもの、とした。面白いのですが「唱える」に力点を据えて、「夕されば平和朗唱虫時雨」。

西風の贈物なり赤蜻蛉

「西風の、」でも宜しいのですが、現代俳句的には「西風が」と置いたら。

田中 藤穂

鮭茶漬夏の疲れをひきづりて

切株の腰掛並べ秋祭
にこやかに席ゆずらるる秋のバス

線路脇陽にかがやける花芒
酔芙蓉まだ諾へぬ死が二つ

にこやかに席ゆずらるる秋のバス

「秋のバス」。あるいは「春の人」などと遣った高名な句もありました。読み手の想像にまかせた表現なんですよ。

線路脇陽にかがやける花芒

線路ぎわにある芒だからこそかがやくのでしょうか。朝日か夕日を連想しますが、勿論昼でもいい。

酔芙蓉まだ諾へぬ死が二つ

上五で切れがあつて坐五でも切れる。いわゆる二句切れ。初心の頃は「いけません」と言われたのですが、いつ頃からか普通に遣われるようになった。そして私もそう遣っているのです。

須賀 敏子

桜葉のひらりひらりとまだ九月
稲妻や録画機能を狂はせり
苦瓜の日ごと小さし姉訪はん
実紫開いた本に覚書
ひたすらに朝顔咲けり友の病む

稲妻や録画機能を狂はせり

ここは純粹に二句切れです。直らないものなら仕様がないといえますが、「稲光録画機能の狂ひけり」「狂はず」は他動詞、「狂ふ」は自動詞。全てとは言えませんが、凡そ句歌は自動詞の方がよく坐る。

秋川 泉

潮なぎて二尾の鯉飛ぶ浜離宮
夕暮れやまだ香の浅き金木犀
コノモスのすでに残花となりけり
蓮池になごりの蕾紅きこと

潮なきて二尾の鱈飛ぶ浜離宮

私、しばしば言いますが、散文の語序で句歌を綴りますと、平凡で、めりはりのない、ありふれた句歌になってしまふのです。「鱈の二尾飛んで潮なく浜離宮」。

コスモスのすでに残花となりにけり

当りまえのことを当りまえに述べているようすがそうではない。コスモスの残花を詠んだ句ばまず無いのです。

蓮池になごりの蕾紅きこと

この句も「なごりの蕾」。だからその「紅さ」がひときわ目にしみるのです。

赤座 典子

花茗荷うまくいかない蝶結
ぼつねんと案山子の肩の痩せ我慢
トンネルに白萩のはや絡み初む

ぼつねんと案山子の肩の痩せ我慢

「痩せ我慢」がやっばり句のことばではない。その肩に、我慢してゐつ案山子の姿を見ているわけですから「ぼつねんと案山子や肩が我慢せり」。いいところを見えています。

紅の実を鏝めて山法師

久しく山法師の実を食べていません。「鏝めて」の措辞で今思ひおこしています。

七郎衛門吉保

太陽光受けるパネルと稲の花
五線譜に溢れ出しをる秋徹雨
竹皮に新米握り飯一つつ
去年鑑賞今年味見の月下美人

太陽光受けるパネルと稲の花

田んぼに隣る太陽光発電のパネル。並みの作者なら「……パネルや、稲の花」としたくなる筈だが、吉

保さんは「パネルと稲の花」と置いた。

去年鑑賞今年味見の月下美人

花から実が二年がかりである、ということなのですが、「去年」「今年」がやや繁雑。「鑑賞し実を味はうて月下美人」。

中川句寿夫

朝の風沼より吹いて案山子上げ
つづれさせ母にゆっくり効く葉
胡麻叩く婆の気ままに手を貸さず
金木犀終の住処の香なりけり

朝の風沼より吹いて案山子上げ

「案山子上げ」。「案山子揚げ」とも書きますが、この方は本格的に祭りごとをする地方の言いよう。当地ではただ単に、ごころうさま、の意を込める。去年もたしか案山子をひき上げた日に山向うの沼より風が吹いていた、と。

つづれさせ母にゆっくり効く葉

いまだにこの虫の鳴き声がどうして「針させ糸させ……」などと聞こえるのかふしぎでならぬ、とある席で言いましたら、夢のない男だ、といわれたのでした。年よりにはすぐに効くよりも遅効性の薬の方がからだにやさしいのは、夢のあるなしに附らず確かなことなのです。

黍の秋母からものを寸借す

黍をつくる農家は、黍專業のところ以外は随分少なくなつたようですが、友人の家ではその母上の生存中ずつと作っていました。黍餅が好物の母のため、なのでした。あの黄色い、幾分歯ごたえのある餅を私も相伴にあずかったこと度々でしたが、今はそんなこともなくなつてしまつたのでした。そして、母からの寸借が、お金では旗く「もの」とするのが、いかにも句寿夫さんらしい。

佐藤 喜孝

戦にゆく無人飛行機思ひ草

現金封筒ハイビスカスにまた苔
九月尽雲の切れ間の宇宙かな

戦にゆく無人飛行機思ひ草

戦争は今や飛行機にしる戦車にしる無人が当りま
え、という。攻撃されるのは無論、人、なのだが。
そして太宰治は富士に月見草をとり合わせたし、あ
の折笠美秋は、戦さの廢墟が月見草にはもつと似合
う、と言いました。対して喜孝さんは「思ひ草」で
あるう、と。あの花を、私自身はあまり気持のよろ
しい花ではない、と思つていたのですがいい花に詳し
い知人が「よく見なさい、随分可愛い花なのです
から」と言われて。それから見方を変えたのでした。

現金封筒ハイビスカスにまた苔

花に疎い私にはこの花は随分ややこしい。夏の花
なら夏だけ咲いてくれれば宜しいものを、盆栽を本
格的に育てている友人の温室には、片すみに幾鉢か
の花（その奥さまのもの）があつて、ハイビスカス
は時知らずに咲いているのでした。で、現金封筒。

傳句会 席題「柿」

十月十一日 カフェ傳

百目柿一枚二枚と重ね着す 理和
快速を見送るホーム猫じゃらし 綾子
柿襖ひとり薄暮の露天風呂 純子
穴惑しばらく草を鳴らしをり 敦子
麗はしき観音蔵し柿の村 藤穂
さつぱりと一日だけの秋祭 敏子
マネキンに見えてゐるなり秋の風 なほ子
足裏から秋を覚える歳かな 佳子
秋風や空家の庭に猫二匹 泉
団栗落ち唐三彩の独楽回り 吉保
銀杏の淡き鶺鴒色点々と 典子
入舟の水脈の弓なり柿日和 喜孝
あをやぎ句会

十月十八日 京橋プラザ区民館

そう、このくらい離れた「もの」を取り合わせて据
える、具体的な鑑賞文を書きにくくする方向に向か
うことで句が大きくなる。負け惜しみの言ではあり
ません。

九月尽雲の切れ間の宇宙かな

陰曆の廃つたと言つていい現在では、「九月尽」
は陽曆九月とすることが多いようです。二月尽、四
月尽、六月尽等々、何月でも「尽」をつけますし、
いつだったか「師走尽」とある句をとつた選者があつ
て、今や收拾のつかぬ事態になつていているようです。
喜孝さん句は、季節の移りかわる、そういう時季の
秋を惜しむべき空。だからこそ「宇宙」と大きく措
辞して上手におさまつたのです。



秋暑し上着の裾を敷かれぬて なほ子
昨日より花野膨む牛膝 純子
柿の実の溢るる三和土人気なく 敦子
隙間なく囲むカンナや大農園 佳子
かほのなき仏にひとつ柘榴の実 綾子
宵闇を犬と連れ立つ家路かな 慶子
厚切りに天ぷら蕎麦の茄子南瓜 藤穂
鉄棒が垂直に落つ秋の風 喜孝

秋萩句会 十月二十五日

兼題 秋刀魚 朝寒 安達宅
田園にたわわな柿や旅ごころ 房代
十三夜設え終えてまみゆ待つ 和代
コスモスのゆれる一面吐息もれ 加代子
秋高し満開菊花出迎へる 澄子
サンクスで秋刀魚は買はぬ7でも 喜孝

毎月25日発売 月刊 **俳句界** 2016年12月号
 定価1200円(税込)

特集 女性俳句なしに
現代俳句は語れない!
対談 池田澄子 VS 大木あまり
 ○実力女性俳人推薦! 古今の女性俳人
 権未知子 鎌倉佐弓 鳥居真里子
 辻桃子 対馬康子 照井翠 奥坂まや

写真とエッセイ 著名俳人の家族写真
 ○水原秋櫻子…徳田千鶴子
 ○星野立子…星野高士
 ○上田五千石…上田日差し
 ○長谷川かな女…三田完

2016年 俳句界NOW 波戸岡旭
 特別作品50句 今井聖

21句 大久保白村 松林朝蒼 日下野仁美
 本セクション 雑誌「山河」 山本敏倅
 高柳克弘「鷹」

対談 佐高信の甘口で「子ハ!」
 酒井啓子 (千葉大学教授)

別冊 投稿俳句界 一流選者20名!
 日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。
 株式会社 文學の森 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
 お求めは… ☎ 169-0075 TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

あとがき

あ つと言ふ間に「火恋し」といふ季節に移ってきた。今奥の細道を読み始めた。前に読んだ時は死を覚悟してなど大袈裟なと思つたが、今読むとしみじみと同感してゐる自分がゐた。今月も新会員を迎へた。俳句と友達になつていただかうお力添へが出来たらと丹田に力を入れ直してゐるところ。

新 会員の紹介

矢野 澄子 中野区弥生町一丁目

二〇一六年十一月号

発行日 十一月三日
 発行所 東京都中野区中央2-50-3
 電話 090-98828-4244
 ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房
 カット/松村美智子・テイリ エイマ
 表紙・佐藤喜孝

郵便振替 00130655526 (あを発行所)
 会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年
 乱丁・落丁お取替えします。